

私は、年に3コマだけですが、熊本大学で教員を目指す学生たちに「生活科教育」という授業を担当させてもらっています。小学校には「生活科」という授業がありますが、生活科は、乳幼児期の「遊びながら様々なことを学んでいる**学びの芽生え(無自覚的な学び)の時期**」から、小学校以降の「意識的に学ぶようになっていく、**自覚的な学びの時期**」への移行にとっても重要な役割を持っていると考えられています。私は小学校の教員免許は持っていませんので、学校での授業の仕方について教えることなどはとてもできませんが、「小学校に上がる前の子どもたちの様子」や「就学前教育で大切にしていること」などを保育者としての立場、経験から、私なりの思いを伝えるようにしています。

先日も、オンラインで授業を行いました。そのなかで『てん』(ピーター・レイノルズ作・谷川俊太郎訳)という絵本を紹介し、4月のからたち会総会(オンラインで開催)で保護者の皆様にお話ししたような今の教育改革の流れ(知識集約・知識偏重型の「教え育てる」教育から、「解のない問い」に解を見いだせる人材が育っていくための教育へ)などの話をし、当園の子どもたちが遊んでいる様子の動画なども見てもらったりしました。

その授業について、ある学生がこんな感想を寄せてくれました。(ほぼそのまま掲載しています。)

(絵本『てん』のあらすじ: お絵描きの時間に何も書けないでいた主人公ワシテに、先生は「何かしるしをつけてみて」といいます。そして、ワシテは紙の真ん中にペンを押し付け、“てん”を描きます。それをじっくり見た先生は、ワシテに「サインして」といいます。ワシテは「絵は描けなくても名前ぐらいかけるもん」とその紙にサインをします。翌日学校へ行くとワシテの描いた“てん”が立派な額縁に入れられて飾ってありました。それを見たワシテは、「ふーん! もっといいんだってわたし描けるわ!」と色々な工夫をしながら様々なてんをどんどん描き始めます。そして展覧会を開くまでになり…… という内容です。)

絵本『てん』。絵が描けないワシテへの先生の温かい対応を見て、先日体験したある出来事が浮かんできた。小学校1年生の授業を見学したときのことであるが、大人の私からすると不思議な光景が広がっていた。

子どもたちは椅子に座り、手を腰の後ろに当てている。はじめは意味がわからなかったが、どうやら手遊びをしないように手を後ろに置かせていたようである。正直なところ、虐待のように見えてしまったが、私の感覚がズレているのだろうか。

その授業では、先生が問いを出し、子どもたちが考え、書く時間があつた。しかし、数名の子どもたちは、じっくり考えているようで何も書けずにいた。授業が終わってもその子たちは書けなかったのだが、先生が付箋に何か書いて子どもの連絡帳に貼っていたため、覗いてみると、「〇〇さんは、授業中に書きませんでした。ご家庭でしっかり見てください。」というようなことが書いてあつた。丁寧なようで、何とも冷たい対応だと驚いたことを覚えている。

『てん』に登場したワシテの先生は、絵が描けないワシテのことを否定的に見ておらず、肯定的に見ていたからこそ、ワシテの自信とやる気を引き出すことができていた。私が見学した授業では、「遊びじゃないとよ!」と先生がシメるシーンも見られ、子どもたちは行儀が悪いという否定的な見方に支配されているのを感じた。これでは小1ギャップが起こるのも必然である。

私自身、幼児期の教育に興味があり、幼稚園課程を受講したり、保育士の試験を受けたりしているが、そこで学ぶことは、目から鱗が落ちることばかりである。小学校や中学校の免許だけしか持たない先生は、「しつけ直す」という意識でシメる傾向が強い。私が見学したクラスの隣のクラスでは、より激しく怒鳴る声が響き渡っていた。「しつけ直す」アプローチからするとそれが、究極の形ということになるのだろう。このようなやり方を私はやりたくないし、このようなやり方に流されたくもないと考えているが、今のうちに確固たる意思を固めておかなければ、知らず知らずのうちに流されてしまうかもしれないと不安も感じている。

『教えから学びへ』(汐見稔幸、河出新書)が紹介されていた。子どもたちが、幼児期に主体的に学ぶ力を身につけても、それを活かさずリセットし、じっと動かないロボットになってしまうのが今の学校の現状だ。幼児期の教育が変化し進化し続けていることに気づかず、幼児期に築きあげた宝を台無しにしているのが、今の学校教育なのである。

河内からたち保育園の本格的なアスレチック施設のような園庭を見たとき、「解のない問い」に解を見出せる力がどのように身につくのか、それがよくわかった。たとえば、からたちTOWERは、子どもたちにとっては、不可能とも思えるものである。それを乗り越えるためには、子どもたちに秘められたさまざまな力を発揮しなければならない。目標を見てひるまない心、試行錯誤する力、計画力、協同する力などありとあらゆる資源を駆使しなければならないのだ。目標を達成するにしろ、しないにしろ、その過程で磨かれる力は大きいものがある。

フィンランドの校長先生の動画(フィンランドの校長先生が日本の小学校を見学中に、マラソン大会で子どもたちを競争させていることに対して疑問をぶつけるというシーンの動画)は、以前見たことがあつた。日本の学校は同調圧力とともに、競争圧力も強いものがある。それにより身に付く力もあるが、しかし、それ以上に失っている力も大きいことに気づく必要がある。この動画はそのことを教えてくれる。

私は、幼稚園育ちで、園庭で遊ぶ機会もほとんどなく、祖父の迎えが待ち遠しかったことを覚えている。園での記憶はほとんど残っていない。庭の金木犀によじ登ったり、畑で遊んだりという園から帰ったあとに遊んでいた記憶ばかりである。主体的な遊びの重要性をここでも感じる。そのような体験ができる河内からたち保育園の園児たちは幸せだ。その幸せを私が味わうことはできないが、これから出会う子どもたちに少しでもそのような感情を味わわせることができたらと考えているところである。

この感想を読み、現在の小学校での様子が垣間見えて、たえすすべての学校がそうではないにせよ、実際にそのような指導が行われていることを知って残念に思いました。しかし、こうして私たちの園がめざしている保育を、いずれ教員になるであろう学生が理解してくれたことをとてもうれしく思いました。同時に、きっと将来、子どもたちの気持ちを理解し、子どもたちが自ら成長しようとする姿を支援することのできる、子どもたちの幸せを一番に考えることのできるすてきな先生になってくれるだろうという未来への希望も感じることができました。